

# 社会関係資本形成に向けた ワークショップ技法に関する研究

— まちあるきプログラムづくりにおける評定尺度抽出の検討 —

土屋 薫\*・須賀由紀子\*\*

## 要 約

先行研究から、地域社会における「来訪者」としての大学生が地域に同化していくプログラムの構築可能性は確認されている。これは、大学生が地域を生活基盤とする中学生・高校生と勤労世代の大人たちとの間を取り持ちながら、自身も生活者の意識に近づき地域の持つ価値へ気づいていくプロセスとして把握されている。ただこうしたプログラムを社会関係資本の構築へとつなげるためには、さらなる方法論の検討が求められる。

そこで本研究では、「地域の持つ価値は『ひと・自然・歴史・まちなみ・ライフスタイル』という5つのパラメーターからとらえられる」という仮説に基づいて、これら地域の持つ価値がどのように意識されるのか、まちあるきのプログラムを実施する中で検証した。

具体的には、まちあるき後のまちの評価をSD法で実施した。今回はこのSD法の評定尺度を、まちあるきの事前に当事者たちに、KJ法を利用したワークショップを実施してもらい20語を抽出した。その結果から因子を抽出したところ、5つの成分で56.5%の説明可能であることがわかった。ただし、この成分と先の仮説の5つのパラメーターとの対応関係は不十分で、今後は、評定尺度を抽出するプロセスの精査が望まれる。

キーワード：関係人口、SD法、まちの魅力

トップで構成されている。

## 1. はじめに

### 1-1 研究の背景

筆者らはこれまで、アクティブ・ラーニングの観点から、地域に愛着を感じる若者の育成を目的とする「まちあるきプログラム」の開発に取り組んできた。その背景には、少子高齢化の進展で本格的な人口減少局面を迎える中、弱体化した地域コミュニティに代わって、地域に愛着を持ち、地域を大切に考える人を形成する意識的なしなげづくりが求められているという問題意識があった。

このプログラムは、基本的に以下の4つのス

- 1) 大学生が、まちの魅力に気づきをもたらす「まちあるきプログラム」を考案する
- 2) このプログラムに沿って、大学生と高校生が一緒にまちあるきを行う
- 3) 歩いた地域についての印象や発見などを話し合いながらまとめる
- 4) まとめた意見を、大学生が地域住民にフィードバックする

これは、大学生を要として、一方で高校生、また他方で地域住民を対象として、地域の価値を共有する場をつくり、両者をつなぐことで成り立つプログラムである。ここでは、高校生は地域の持つ価値への気づきはまだ十分ではない存在とし

2019年11月30日受付

\* 江戸川大学 現代社会学科教授 レジャー社会学

\*\* 実践女子大学 現代生活学科教授 生活文化論

て、また地域住民は日常生活の中で地域の価値をふりかえる機会が十分ではない存在として想定されている。そして大学生は、外部からの「来訪者」として地域の価値にあらためて光を当てる役割が期待されている。つまり、この三者間の相互作用を通じて、地域の暮らしを大事に考える人を意識的に増やし、地域における信頼関係や互酬関係、ネットワークといった社会関係資本を循環的に形成していくことをねらいとしたものである。

これはいわば、地域の価値を共有するプログラムとして位置づけることができる。ただ単にまちあるきをするだけでなく、そこに景観評価を取り入れることで価値の可視化を図ったものである。しかしながら、実際にSD法による評価項目の選定まで作業に盛り込むとすると、ブレインストーミングとKJ法を実施して情報を分類し、そこからさらに形容詞対を抽出することになるので、理解と進行にかなりの時間が割かれてしまう。

こうしたプログラムを、本来の目的に沿って社会関係資本の構築へとつなげるのであれば、さらなる方法論の検討が求められるのが実情である。

## 1-2 研究の目的

先行研究では、「地域の持つ価値は『ひと・自然・歴史・まちなみ・ライフスタイル』という5つのパラメーターからとらえられる」という仮説に基づいて、地域の持つ価値がこれら5つの軸に沿ってどのように意識されるのか、まちあるきのプログラムを実施する中で景観評価を実施し、その有効性はある程度検証されている。

そこで本研究では、景観評価の項目を抽出する場面に着目して、参加者に負担をかけずに地域の価値を探る手法の検討と検証を試みることにする。

## 2. 実験の概要

### 2-1 研究の方法

以下(1)と(2)を実施して、景観評価項目の抽出方法とその妥当性を検討する。

#### (1) SD法における評価項目の抽出

SD法で用いる評価項目としての形容詞対を抽出することが求められるが、今回は感覚の言語化を容易にし、なおかつグループで情報を分類する上で作業が進めやすくなるように、またあらかじめ情報・イメージが共有しやすいように、以下の2段階、各3つのステップを導入することとした。

##### 【第1段階：情報共有＝感動共有の場づくり】

- ① あらかじめ「自分が魅力を感じた場所」の画像を数枚用意しておいてもらう
- ② グループワークの時点で、自分が用意した画像をみんなに見せ、その感動ポイントを伝える
- ③ 全員が発表する間、進行役を中心に、感動したポイントに関わる質疑を行いながら感動の共有を進める

##### 【第2段階：KJ法スタイルの分類と形容詞探し】

- ① KJ法と同様に、先ほど発表して言語化した内容をカードに書く
- ② 全員が書き下ろしたカードを一面に並べ「似た者どうし」を探して近くに寄せる
- ③ 集まった(分類された)カードにあてはまる「形容詞」をグループのタイトルとする

この方法だと発表の際に一度言語化するので、カード化する際の時間が短縮される。またKJ法の場合、分類されたカードのタイトルとなる言葉や表現を探すのにコツが必要だが、使う言葉を「形容詞」と限定することで、ここでも作業の障壁を減らすことができる。

#### (2) 景観評価プログラムと結果分析の実施

景観評価プログラムについては、大学生(江戸川大学と実践女子大学)と高校生(神奈川県総合学科高校)とで行うため、神奈川県からの交通の便の良いことを要件とした。また地域の持つ価値を「ひと・自然・歴史・まちなみ・ライフスタイル」という5つの視点から捉えることを想定しているため、自然にあふれておりなおかつ人工物が存在しているところ、また歴史的な趣きととも

に様々なひとの暮らしの営みを感じられる場所が得られるところとして、東京都立長沼公園（八王子市）を選定した。

また7月19日に現地の下見を実施したが、実際の実験実施日を8月上旬の真夏と予定していたため、自然公園で起伏の激しい長沼公園の尾根と谷あいの行き来はなるべく避け、尾根筋を通りかつ直射日光を遮る日陰のあるルートと調査ポイントを選定した。

なお統計処理については、IBM SPSS Statistics バージョン 24 を用いた。

## 2-2 プログラム参加者の選定と実施日

### (1) SD 法における評価項目の抽出

SD 法における評価項目の抽出は、江戸川大学学生7名と実践女子大学学生3名の計10名で実施した。また補足的に、上記10名のほか神奈川県総合学科高校生9名（男子4名、女子5名）を加えた計19名で実施した。

実施日 2019年6月1日、8月5日

### (2) 景観評価プログラム

景観評価プログラムは、上記10名の大学生と9名の高校生計19名で実施した。

実施日 2019年8月6日、8月7日

## 2-3 実施場所

### (1) SD 法における評価項目の抽出

2019年6月1日に関しては、大学生のみで江戸川大学にておこなった。8月5日に関しては、参加者の都合を鑑みて、東京都立長沼公園にて景観評価を行うため、実験地近くの大学セミナーハウス（東京都八王子市下柚木）にて実施した。

### (2) 景観評価プログラムの実施

2019年8月6日、8月7日とも、(1)と同じく参加者の都合を鑑みて、東京都立長沼公園にて実施した。



図1 東京都立長沼公園の周辺図：八王子記号～多摩センター



図2 東京都立長沼公園の看板地図

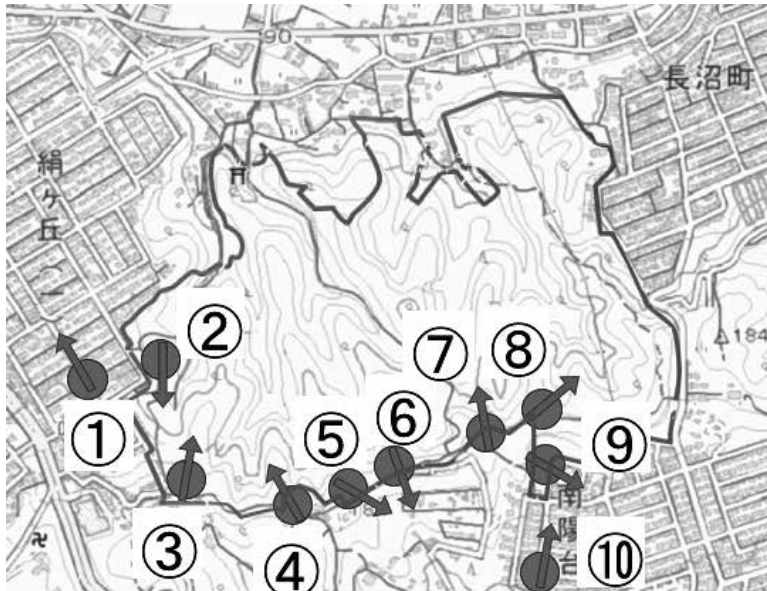


図3 SD法の調査ポイント視認方向

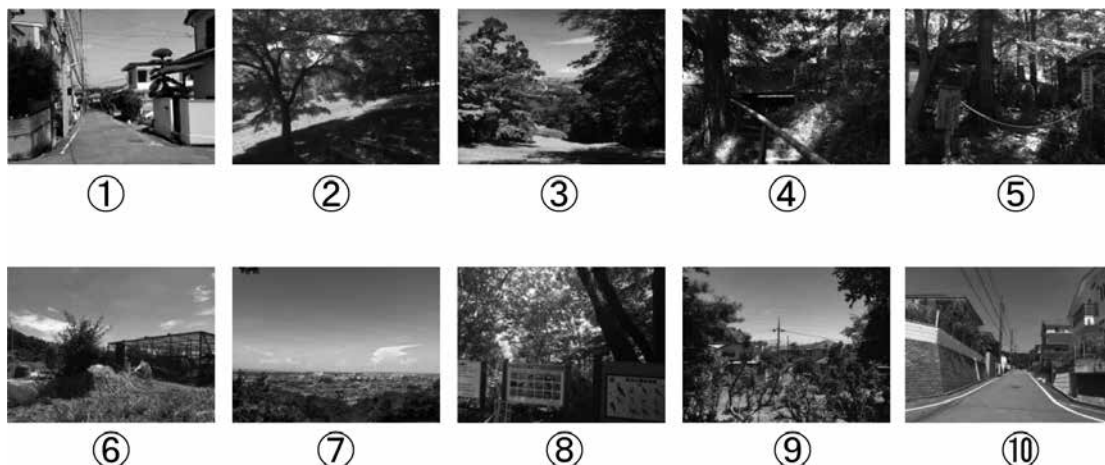


図4 SD法の調査ポイント：①～⑩

表1 事前に抽出した形容詞

形容詞	対形容詞	区分	手法
伝統的な	革新的な	歴史	大学生のみのWSによる抽出分
びっくりするような	おだやかな	ひと	
清々しい	よどんだ	自然	
過ごしやすい	不快な	ライフスタイル	
幻想的な	現実的な	まちなみ	
にぎやかな	さびしい	ライフスタイル	
楽しい	退屈な	ひと	
ありえない	親しみやすい	ひと	
歴史がある	新しい	歴史	
純粋な	ごちゃごちゃした	自然	
のどかな	騒々しい	まちなみ	
機能的な	不便な	まちなみ	
整った	乱れた	まちなみ	
めずらしい	おなじみの	ライフスタイル	
ありがたい	不親切な	ひと	
たくさん	まばらな	自然	
よく知っている	はじめての	歴史	
なつかしい	落ち着かない	歴史	
あたたかい	ひっそりとした	自然	
慣れている	ぎこちない	ライフスタイル	

表2 まちの魅力の枠組み

魅力の区分	関連概念	ワード数	追加数
ひと	文化	4	0
自然	景観	4	2
歴史	時間	4	2
まちなみ	雰囲気	4	0
ライフスタイル	暮らし	4	1

表3 当日ワークショップで追加されたワード

Q21	かわいい	みにくい	当日WS
Q22	きれいな	きたない	当日WS
Q23	おどろき	あたりまえ	当日WS

### 3. 実験の結果

#### (1) SD法における評価項目の抽出

上記の2段階に沿って、まず6月1日に大学生のみで作業を行なった。画像はプロジェクターで共有し、カード化はふせんに行い、ホワイトボード上で分類作業を行なった。同様に8月5日に高校生と大学生との混合で実施した。

大学生のみのワークショップでは、地域の魅力

をとらえる形容詞は15個抽出されたが、これを先行研究で確認された「魅力の枠組み」で整理したところ、偏りが見られたため、5つの形容詞を追加して、各区分4つずつ計20の形容詞を抽出した(表1, 表2)。さらに念のため、被験者である高校生とともに実施した8月5日のワークショップで、3つの形容詞を追加した(表3)。

結果からいうと、スマホ世代の若者には障壁となる要素はほとんどなく、「自分の気に入った場所」について「どこがどう良かったのか」について語るのに、言葉に熱がこもるしわかりやすいようであった。またよく理解できない場合でも、「感性や好みの違い」という割り切りがあるせい

表4 調査票作成用に読み替えた形容詞

ワークショップで抽出された語	→	評価項目として読み替えた語	→	対にした語
(おもしろい)	→	びっくりするような	→	おだやかな
楽しい	→	-	→	退屈な
(苦しい)	→	ありえない	→	親しみやすい
(便利な)	→	ありがたい	→	不親切な
すがすがしい	→	-	→	よどんだ
(自然できれいな)	→	純粋な	→	ごちゃごちゃした
たくさん	→	-	→	まばらな
あたたかい	→	-	→	ひっそりとした
よく知っている	→	-	→	はじめての
なつかしい	→	-	→	落ち着かない
(古い)	→	歴史がある	→	新しい
(おいしい)	→	伝統的な	→	革新的な
(偉い)	→	幻想的な	→	現実的な
(住みやすい)	→	機能的	→	不便な
(自然を感じる)	→	のどかな	→	さわがしい
(人工物きれい)	→	整った	→	乱れた
過ごしやすい	→	-	→	不快な
(人とのふれあいがある)	→	にぎやかな	→	さびしい
めずらしい	→	-	→	おなじみの
慣れている	→	-	→	ぎこちない



図5 KJ法によって抽出された形容詞群

か、レスポンスが早く、尋ねられたり掘り返されても慌てないし、否定されても大きなショックとはならないようであった。もちろん発表時間もたとえば「1枚の写真あたり1分程度で」と時計とベルでコントロールすれば、参加人数で進行時間が計算できる。

また形容詞の抽出についても、ほとんど壁に当たるといったことは発生しなかった。もちろんKJ法では分類した後の構造化が待っており、その

時点で作業上の関門が発生するが、今回は形容詞の抽出だけが目的なので、この段階で作業が終了する。したがって、記述的な記録を取る必要もないほど、のべ2回ともストレスを感じないまま、作業を終了させることができた(図5)。

それから最終的な文言は、それぞれのカードの内容から読み取れる形に噛み砕いた形容詞として言い換えて用いた(表4)。

表5 基本統計量

	おだやかな	楽しい	親しみやすい	ありがたい	すがすがしい	純粋な	たくさん	あたたかい	よく知っている	なつかしい	歴史がある	伝統的な	幻想的な	機能的な	のどかな	整った	過ごしやすい	にぎやかな	めずらしい	慣れている	かわいい	きれいな	おどろき
区分	ひと	ひと	ひと	ひと	自然	自然	自然	自然	歴史	歴史	歴史	歴史	街並	街並	街並	街並	ライ	ライ	ライ	ライ	当日	当日	当日
度数	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190
平均値	3.55	3.36	3.73	3.44	3.9	3.45	3.24	3.12	2.86	3.59	3.43	3.47	2.66	2.95	3.93	3.5	4.01	2.98	2.79	3.44	3.16	3.65	3.12
標準偏差	1.32	1.02	1.05	0.81	0.96	1.08	0.97	1.25	1.31	0.85	1.04	0.93	1.38	0.98	1.16	1.16	0.87	1.18	1.30	0.86	0.61	0.93	1.08
最小値	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1
最大値	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5

SD法（意味微分法 Semantic Differential Method）調査票 2019

地点No.	日付	時間	氏名	ID	入力担当

※調査時に太線内は記入しないこと

★この場所を感じることであてはまると思う数字（1～5）に○をつけてください。

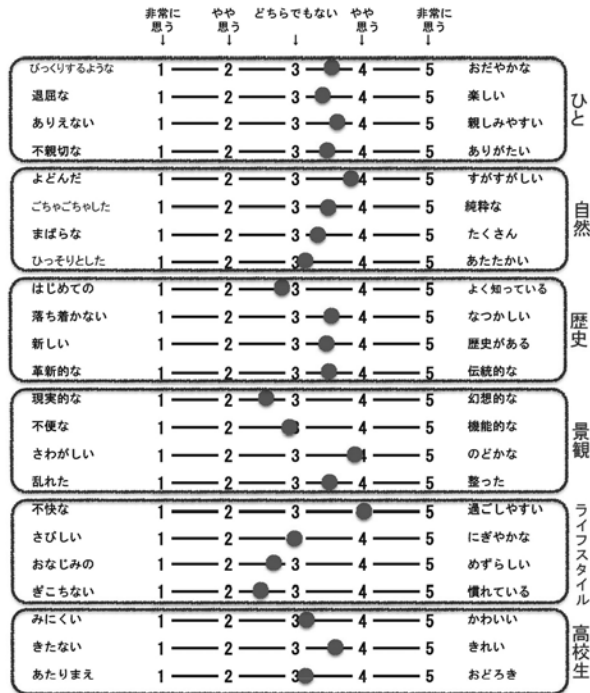


図6 SD法調査票

(2) 景観評価プログラムの結果

19名の被験者によって10ヶ所のポイントを対象にして、のべ190票の実験結果が集まった。基本統計量は表5の通りだが、分布が偏ったものはサブスケールごとに分散している。また調査票は図6の通りで、あわせて全体の平均を書き込んだ(図6)。これを見ると、自然公園周辺を評価ポイ

ントとしたため、全体として自然に関わる評価の得点が高くなっていることがわかる。

さらに、地点ごとに地域の魅力の5つの得点を集計してレーダーチャートでにしてみると、次のようになる(図7～図16)。

また因子を抽出したところ、5つの成分で56.5%の説明可能であることがわかった(表6・表7)。

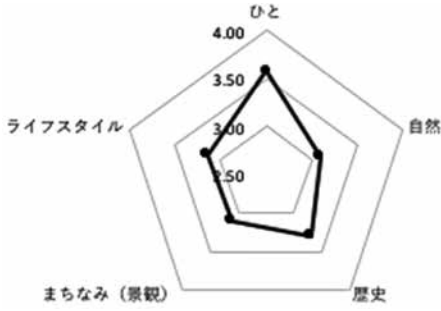


図7 地点1

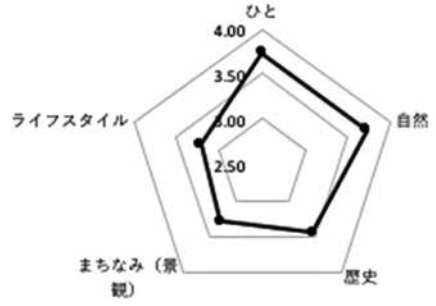


図8 地点2

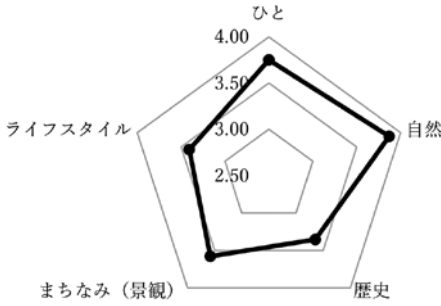


図9 地点3

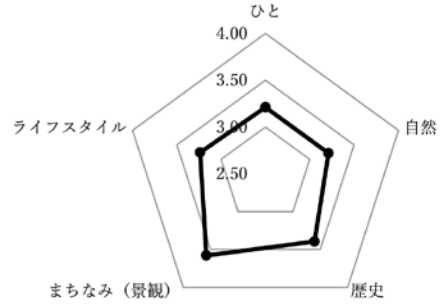


図10 地点4

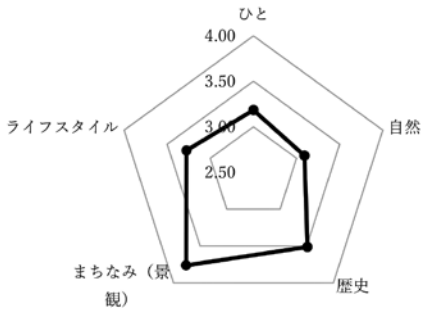


図11 地点5

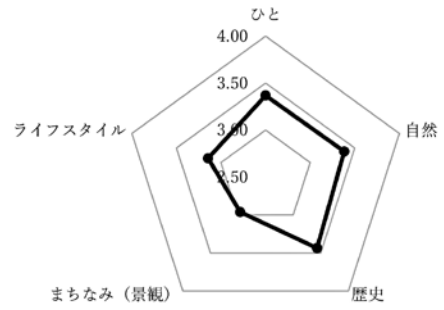


図12 地点6

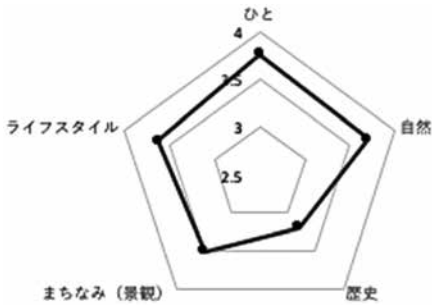


図13 地点7

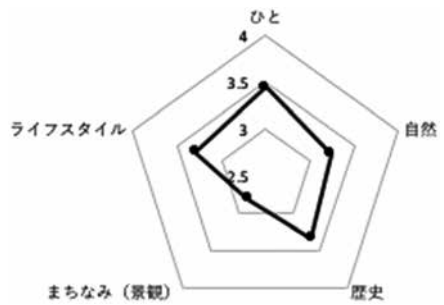


図14 地点8



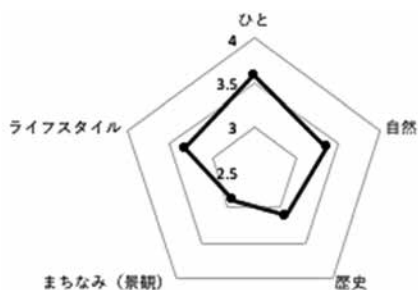


図 15 地点 9

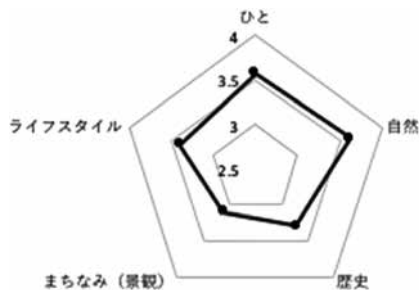


図 16 地点 10

表 6 説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	4.5	19.6	19.6	4.5	19.6	19.6	3.7	15.9	15.9
2	3.7	16.2	35.8	3.7	16.2	35.8	2.8	12.1	28.0
3	2.4	10.3	46.1	2.4	10.3	46.1	2.6	11.2	39.2
4	1.2	5.3	51.4	1.2	5.3	51.4	2.0	8.7	47.9
5	1.2	5.1	56.5	1.2	5.1	56.5	2.0	8.6	56.5

表 7 回転後の成分行列

項目	成分				
	1	2	3	4	5
めずらしい:ライフ	-0.77				
親しみやすい:ひと	0.76				
よく知っている:歴史	0.69				
おだやかな:ひと	0.68				
幻想的な:まちなみ	-0.49				0.41
なつかしい:歴史	0.49				
過ごしやすい:ライフ		0.80			
すがすがしい:自然		0.76			
楽しい:ひと		0.55			
整った:まちなみ			0.79		
機能的な:まちなみ			0.58		
慣れている:ライフ	0.46		0.55		
あたたかい:自然			0.46		
ありがたい:ひと			0.41		
のどかな:まちなみ				0.74	
純粋な:自然				0.70	
にぎやかな:ライフ		0.49		-0.57	
たくさん:自然				-0.52	
伝統的な:歴史					0.85
歴史がある:歴史					0.75

因子抽出法：主成分分析

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法 a

a8 回転の反復で回転が収束しました。

#### 4. 考察と今後の課題

ただし、この成分と先の仮説の5つのパラメーターとの対応関係は不十分で、今後は、評定尺度を抽出するプロセスの精査が望まれる。

しかしながら、これらの分離が曖昧に見える理由は、必ずしも仮説における5つのパラメーターの設定不備を意味するわけではない。というのも、図8・9・13（地点2・3・7）、図10・11（地点4・5）、図12・14（地点6・8）、図15・16（地点9・10）において確認できるように、各地点におけるパラメーターのバランスに類似したパターンが見られるからである。このことはすなわち、地点2・3・7と地点4・5と地点6・8と地点9・10において、それぞれ共通した傾向があることを示している。地点の特性から考えると、地点2・3・7においては「眺望」、地点4・5においては「自然と共存してきた伝統的な暮らし」、地点6・8においては「自然の活用」、地点9・10においては「団地の景観」が大きく結果に作用しているように思われる（図4）。そしてこれら「眺望」「自然と共存してきた伝統的な暮らし」「自然の活用」「団地の景観」という要素が、当該地域の価値として高校生と大学生に意識されたものと考えられる。

そしてこうした気づきとその「見える化」こそ

が、多世代間交流を軸とした社会関係資本の循環的形成に資するものと思われる。

#### 参考文献

- 茶谷幸治, 2008, 『まち歩きが観光を変える 長崎さるく博プロデューサー・ノート』学芸出版社
- 藤田弘夫, 2006, 「地域社会と地域社会学」『地域社会学の視座と方法』東信堂
- 原田克己・滝脇裕哉, 2014, 「居場所概念の再構成と居場所尺度の作成」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』第6号
- 井口貢, 2007, 『まちづくりと共感, 教育としての観光 地域に学ぶ文化政策』水曜社
- 岩佐恭子, 2017, 「ニュータウンから探る, まちの担い手が育つコミュニティ」『コミュニティ政策16』コミュニティ政策学会
- 小林修一, 2002, 「コミュニティ意識の諸相」『転換期の地方都市と福祉コミュニティの可能性』梓出版社
- 前山総一郎, 2017, 「都市内分権とコモンズ 社会関係としてのコモンズのコネクト (P.ラインバウ) を基に」『コミュニティ政策15』コミュニティ政策学会
- 三好和代, 2008, 「少子高齢社会における居住地の選択および地域コミュニティの変容」『21世紀の地域コミュニティを考える』ミネルヴァ書房
- 土屋薫, 2015, 「オープンガーデンにおける交換過程に関する考察——着地型観光における交流の構造把握に向けて——」『江戸川大学紀要』25号
- 土屋薫, 2013, 「着地型観光支援ツールとしてのデジタルマップの可能性——観光情報とルート選択に関する考察」『江戸川大学紀要』23号
- 『高大連携によるアクティブ・ラーニング』江戸川大学・実践女子大学大学間連携事業報告書 2018